

渋谷区立松濤美術館

特別展
明治文学とランプ

— 榎コレクションを中心に —



秋草時絵箱台付台ランプ

会期 昭和58年9月6日(火) ⇨ 10月23日(日)

休館日 9/11・16・19・24・26 10/3・9・11・17

会場 第一会場(地下1階)
第二会場(2階特別陳列室)

概説



枕行燈 懐中燭台三種

「東京まで半蔵が動いてみると、昔^{かたぎ}氣質^{あんどん}の多吉の家ではまだ行燈だが、近所ではすでにランプを使っているとところがある。夕方になると、その明るい光が町へもれる。あそこでも、ここでもというふうには。燈火すらこんなに変わりつつあった。」（島崎藤村『夜明け前』）

「その晩の夕飯は何時もより花やかな気がしました。それは申す迄もございません。あの薄暗い無盡燈^{むじんとう}の代りに、今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございます。兄やわたしは食事のあひ間も、時々ランプを眺めました。石油を透かしたガラスの壺、動かない焰を守った火屋^{ほや}、一さう云ふものの美しさに満ちた珍らしいランプを眺めました。（芥川龍之介『雛』）

明治時代、燈火は蠟燭・行燈からランプ、さらに瓦斯^{ガス}燈・電燈へと急速に発達します。明治に生きた人々にとって、ランプの明るさは、それ自体が美であり、驚きでした。またその明るさは、衣服など風俗全般に大きな影響を与えました。文明開化を象徴するもっとも身近な存在、それがランプをはじめとする燈火でした。そして、その時代を知らぬ者にも、ランプ・瓦斯燈といった言葉は郷愁とロマンを感じさせてくれます。

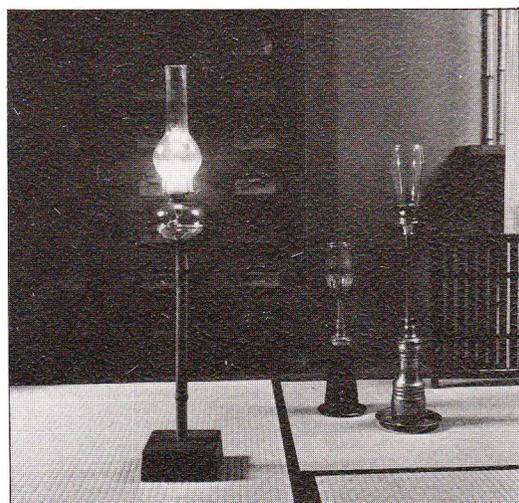
この展観では、渋谷区在住の榎恵氏のコレクションを中心に、ランプをはじめとする明治の燈火器各種、および小林清親・川上澄生などのランプ・瓦斯燈を描いた版画を陳列いたします。

明治初期には、江戸の続きとしての行燈・燭台、そしてさらに貧しい燈火として、「ひで」と呼ばれる松の根を燃やすひでばちなどが用いられました。又、旅に出るには、伸び縮みする懐中燭台・小田原提燈、収納に便利な枕行燈などの旅行用燈火器が必需品でもありました。

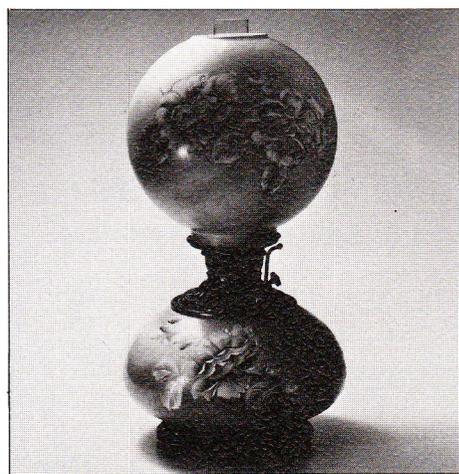
この頃、すでに油を用いる燈火器として、田中久重（カラクリ儀右衛門）が製作した圧搾空気を応用した無盡燈もありました。

しかし、これらの燈火器は、石油ランプ、そして瓦斯燈・電燈の登場により、漸次駆逐されていきました。行燈など並行して用いられもしましたが、石油ランプなどの明るさの前に消えていったのでした。

石油ランプも、当初は輸入されていましたが、その部品等が国内で生産される様になりますと、日本の生活様式に適^{ほんほり}した工夫が施されます。和室にふさわしい行燈ランプ・雪洞ランプや竹台のランプ更には座居の生活に適



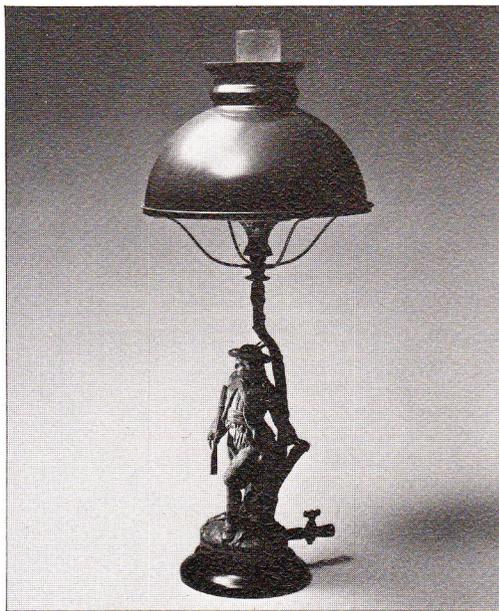
竹台ランプ 無盡燈二種



米国製 G.W.W.型ランプ



国産 台ランプ 二種



フランス製真鍮人物像台ガススタンド

した高さに調節でき、収納にも便利な箱台付きのランプなどが作られたりしました。反対に、天井からぶらさげる釣ランプは従来の生活様式からは考えられない燈火の方法でもありました。その一方で、欧米よりもたらされた美しいガラスの笠を持ったランプが上流の人々の間でもてはやされ、それを模した日本製のランプや笠がつくれ、日本の近代硝子工業が興起する引金ともなりました。

この石油ランプに並行する形で瓦斯燈が用いられました。明治5年に横浜・7年に銀座に瓦斯燈が点灯されましたが、工事が大変なためにその普及は遅々たるものでした。軒燈街燈の多くは、ガス燈と称しながらも実は石油ランプであり、その石油ランプに点燈する会社が作られ、点燈夫が夕暮の町を駆けぬけたのでした。この瓦斯燈は、明治30年代にマントルが実用化され、明治の末には一時盛んとなり、北原白秋・吉井勇などはその青白い光のなげかける情緒を詩に詠いあげました。しかし、それは電燈が普及するまでの短い間にすぎませんでした。

明治11年、アーク燈の試験点灯に成功したのをきっかけに、我が国の電燈の歴史が始まります。明治12年に、エジソンが京都の竹の繊維を用いて最初の実用的カーボン電球を作りましたが、それが日本で作られ普及するには多くの歳月がかかりました。しかし、その明るさも10燭光ぐらい（今日の10Wより少し明るい程度）で、瓦斯燈とそのシェアを争いました。この必ずしも明るくなかった電燈に革命がおこったのは、明治末のタングステン球の発明であり、以後現在に及ぶ電燈の時代となったのです。

本展の陳列を通して、明治一代の燈火の変遷を知るとともに、先人のすぐれた技術・工夫の跡をたどり、またランプなどのものつ機能美・造形美にふれていただきたいと思います。

講演会

○9月17日(土) 午後2時より

「行燈からランプへ」

照明文化研究会会員

米国 Rushlight Club 会員

榎 惠氏

日本風俗史学会会員

○10月8日(土) 午後2時より

「明治文化はランプの光より」

國學院大学名誉教授

樋口清之氏

特別陳列

渋谷区在住作家の作品

「サロンミューゼ（2階）出品目録／作家略歴（50音順）」

伊藤隆康《トゲの箱》1967年 アルミ 高さ66cm
昭和8年（1933）兵庫県明石市に生まれる
昭和33年（1958）東京芸術大学絵画科卒業

大久保泰《早朝の運河（ベニス）》1973年 油彩 F50号
明治38年（1905）愛知県豊橋市に生まれる
昭和3年（1928）早稲田大学商学部卒業

大森啓助《磯》1966年 油彩 P60号
明治31年（1898）兵庫県神戸市に生まれる
大正9年（1920）関西学院高等部卒業 川端画学校で学ぶ

ガストン・ブチ《赤富士II》1982年 リトグラフ 76.0cm×39.5cm
昭和5年（1930）カナダ・ケベックに生まれる
カナダ・ドミニカンハウスオブアダイズで哲学神学を学ぶ

清原啓一《マジョリカのポピー》1982年 油彩 変形25号
昭和2年（1927）富山県砺波市に生まれる
昭和27年（1952）明治大学卒業

児玉幸雄《広場の朝市》1982年 油彩 P12号
大正5年（1916）大阪市に生まれる
昭和14年（1939）関西学院大学卒業

近岡善次郎《みちのく春彼岸》1975年 油彩 F50号
大正3年（1914）山形県新庄市に生まれる
昭和8年（1933）文化学院美術部卒業

西嶋俊親《城門》1981年 油彩 F20号
昭和3年（1928）東京に生まれる
昭和25年（1950）東京美術学校油画科卒業

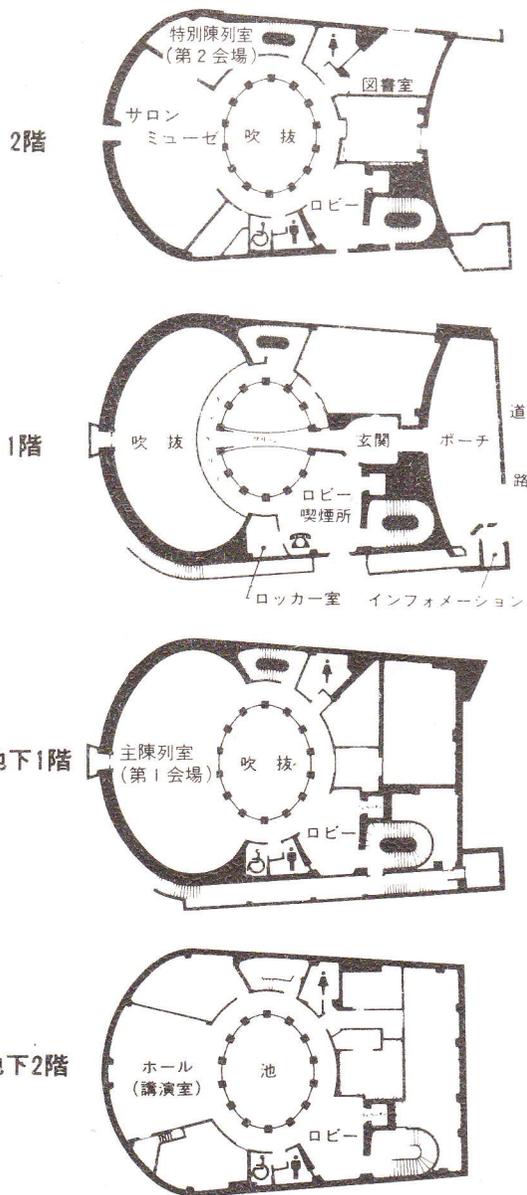
堀内正和《扇形a》1957年 鉄 高さ44cm
明治44年（1911）京都市に生まれる
昭和4年（1929）東京高等工芸学校彫刻部中退

村田勝四郎《トルソ》1943年 ブロンズ 高さ84cm
明治34年（1901）大阪市に生まれる
大正14年（1925）東京美術学校彫刻科卒業

森 芳雄《ひじをつく婦人像》1971年 油彩 F10号
明治41年（1908）東京に生まれる
大正15年（1926）慶応義塾普通部修了

脇田愛二郎《SORROW》1974年 黒御影 高さ31cm
昭和17年（1942）東京に生まれる
昭和39年（1964）武蔵野美術大学卒業

松濤美術館・平面図

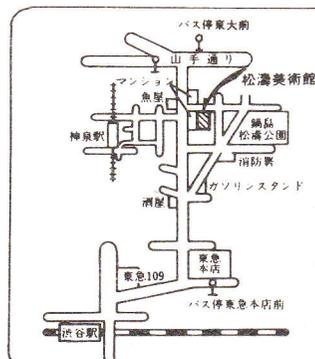


《ご案内》

- 開館時間 午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
- 休館日 第2日曜日及び他の週の月曜日
国民の祝日の翌日
年末年始（12月29日～1月3日）

○入館料

	個人	団体(20人以上)
一般	200円	160円
小・中学生	100円	80円



渋谷区立松濤美術館 〒150 東京都渋谷区松濤二丁目14番14号 電話 (03)465-9421